

第17回 記者懇談会実施要項

- 1 開催日時 平成11年10月19日 (火)
午後3時から
- 2 場 所 100周年記念会館第2会議室
- 3 懇談内容
 - (1) 若手研究者の研究テーマとその成果の中間発表(15時~15時30分)
 - 社会学部教授 寺嶋 繁典
研究テーマ「小児ストレス性疾患の治療と予防
における臨床心理学的実践研究」
(資料1)
 - 工学部教授 堂垣 正博
研究テーマ「鋼構造の強度設計と耐震設計」
(資料2)
 - (2) 学内情報(15時30分~16時)
 - ① 一般入試における受験生への得点公表 (資料3)
 - ② AO入学試験志願者状況 (資料4)
 - ③ 秋季人権啓発行事 (資料5)
 - ④ 関西私立大学理工系HRC・AFC合同シンポジウムの開催 (資料6)
 - ⑤ 学校教育における包括的対処・マネージメントに関する臨床心理学的実践研究の開催
(資料7)
 - ⑥ シンポジウム「21世紀社会と大学院教育—大学とビジネスの接点を求めて—」
(資料8)
 - ⑦ その他
 - (3) 情報交換(16時~16時30分)
- 4 関西大学の出席者
石川 啓 学長
川道麟太郎 広報委員会委員長
浦上 忠 教学部長代理
寺嶋 繁典 社会学部教授
堂垣 正博 工学部教授
荒木紀忠 広報課長
- 5 配布資料
 - ① 『通信』第275号(10月号)
 - ② 『遠来の客』(関西大学出版部)

以上

小児ストレス性疾患の治療と予防における臨床心理学的実践研究

社会学部教授 寺嶋 繁典

さまざまなストレスから心身の不調を訴えて小児科の外来を訪れる子どもは後を絶たない。これらの子どもの治療を行う場合、あらかじめ子どものパーソナリティや、子どもが認知している家族の布置などを十分に理解しておく必要がある。これは患児との面接によっても、ある程度、明らかにすることが可能であるが、言語的表現能力の発達途上にある子どもの場合、欲求や感情を十分に表現できるとは限らないし、まして子ども自身が気づいていない無意識レベルのものについて知ることはきわめて困難であろう。このような場面では言語を媒介としない情報収集の手段を組み合わせる用いる必要があり、描画法はこれに適した方法である。絵を通して子どもの心を如何に理解していくか、その手法の開発が研究課題である。また最近では子どもの心の問題の予防という観点から、学校教育における子どものストレス・マネジメント技法や、テレ・コミュニケーションを用いた教員へのコンサルテーション技法についても研究・開発を進めている。



てらしま しげのり
寺嶋 繁典

教授

かつて淀川を往来した三十石船の中継地として賑わった枚方市出身。1985年、本学大学院博士課程後期課程を修了後、同年4月からは大阪医科大学神経精神医学教室専任臨床心理士として活躍。11年間の病院臨床を経て、96年に助教授として本学社会学部へ着任。

大学院を通じて高橋雅春教授のもとで臨床心理学を専攻し、また後期課程では辻岡美延教授から統計解析の手ほどきも受けておられる。大阪医科大学附属病院では心理テスト、心理療法、学生相談などの心理臨床業務に携わる傍ら、家族画テスト、小児のストレス性疾患、非定型精神病などに関する実証的研究を行い、数々の論文を発表されている。

身長185センチの立派な体格の持ち主ながらアルコールは大の苦手。趣味はスキーと園芸で、最近ではもっぱらバイオテクノロジーによって開発された新種の果樹の栽培に情熱を注いでおられる。『果樹を育てることはカウンセリングに通ずる』というのが持論である。

鋼構造の強度設計と耐震設計

工学部教授 堂垣 正博

筆者は、従来から鋼構造物の安全性評価に関する研究に関わってきた。兵庫県南部地震を契機に鋼構造物の耐震安全性をも勘案した強度評価に関する研究を関西大学学術フロンティア事業の研究とリンクして進めている。ところで、構造物を地震から守る設計には、

- (1) 地震力に構造物の剛さ、いわゆる断面の大きさと耐えようとする耐震設計
- (2) 地震力による構造物の揺れを制御し、その振動を和らげるようとする制震設計
- (3) 地震力による構造物の揺れを和らげようとする免震設計

などがある。上述のうち、(1)は地震時だけでなく、常時の安全性評価とも大いに関係がある。この種の研究(これを耐荷力に関する研究という)は従来から行っていたが、耐震設計の観点から見直している。また、連続高架橋の地震損傷を和らげるため、橋を支える橋脚と橋梁との間に設けられる支承に従来の鋼製から天然ゴム製の水平反力分散支承や免震支承が導入されつつある。しかし、設計規準が確立されるに至っていない。(3)に関する研究として、連続高架橋の地震応答を模擬地震によるシミュレーションで再現し、橋を支える橋脚の地震損傷が緩和できる免震設計のための基礎的研究を行っている。



どうがき まさひろ
堂垣 正博

教授

兵庫県豊岡市のご出身。1972年3月本学土木工学科卒業。74年3月大学院修士課程を修了され、助手に。82年専任講師、85年助教授、97年教授へ昇格。87年4月から1年間在外研究員としてImperial Collegeに滞在され、Dowling教授のもとで鋼構造の終局強度と限界状態設計法に関する研究に従事された。名大工博(81年11月)。先生のご専門は、構造力学・構造解析学・構造動力学である。名誉教授米澤 博博士のもとで構造工学分野の研究と教育・研究の指導法を学ばれた。主たる研究は、鋼構造の限界状態設計法と耐震設計法に関する研究で、安全な社会基盤施設構築のための設計論を研究されている。最近、構造物景観設計や維持管理に関する研究も始められ、研究の幅を拡げておられる。

中学・高校時代は吹奏楽部に籍を置かれ、ホルン・ユーホニウム・トロンボーンの奏者として活躍された。音楽鑑賞が趣味。大のタイガースファン。